

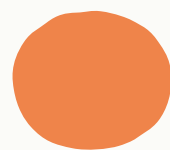
伊東市 観光ブランドブック

ITO-CITY TOURISM BRAND BOOK

伊東市観光課
伊東市ブランド研究会



伊東市
観光ブランドブック
ITO-CITY TOURISM BRAND BOOK



伊 東
I T O

観光ブランド

TOURISM BRAND

はじめに

Introduction

この『伊東市観光ブランドブック』は、わたしたちのまち・伊東市の新しい観光とまちづくりを考える「伊東市観光プロモーション事業」の一環として「伊東市ブランド研究会」が制作したものです。

いままでの観光を振り返ると、一部の事業者だけが関わる産業でしかなく、多くの伊東市民には関係がなかったため、市民の間に訪れた観光客をもてなすという感覚はあまりなかったように思います。

これは伊東市に限ったことではありません。そもそも日本の観光産業そのものが、地域に暮らす人々の意識やアイデンティティとは無関係なビジネスモデルとしてしか発展してこなかったことに原因があるのではないのでしょうか。

21世紀の今、住民を置き去りにして発展してきた古い観光ビジネスは、いろいろな意味で頭打ちとなり機能しなくなっています。

これからの未来に通用する新しい観光のモデルを考え創り出すことは、伊東市の将来を見据える上でとても重要です。

伊東市民の80%は第三次産業に関わっており、中でも観光に関する産業に従事する人の割合は、第三次産業のうち36.8%にもものほり^{1*}、多くの人になんらかの形で観光に関わっているといえます。

この冊子は、伊東市にある地域資源^{ちいきしげん}=地域の宝の重要性を意識共有するために「伊東市ブランド研究会」が探した地域の宝をご紹介します。冊子から市民同士の会話が生まれ、次には市民から観光客の方々へ伊東の宝物を語ることで交流が生まれる。そのためのツールとして使っていただけならと思います。

その交流こそが、「伊東らしさ」を創出し、特色のある資源を活かした、新しい観光まちづくり^{そしゅつ}^{2*}につながっていくと考えます。

伊東市ブランド研究会

1* 「伊東市一般廃棄物処理基本計画」第2章伊東市の概要より

2* 「第3次伊東市観光基本計画」第4章観光振興の基本的な考え方より

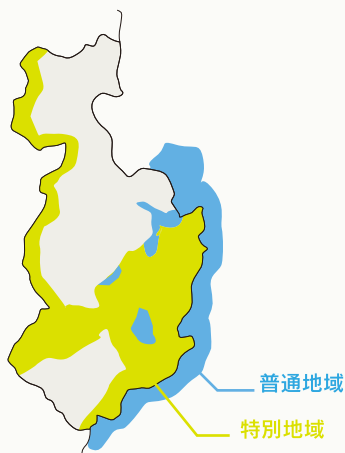
ITO-CITY TOURISM BRAND BOOK

目次

はじめに	P2	かぶき <small>そかものかたり</small> 歌舞伎でも有名な『曾我物語』と伊東氏・河津氏	P23	伊東の著名人 <small>なかやうきちろう さかくちあんご おぎきしろう</small> 中谷宇吉郎 坂口安吾 尾崎士郎	P41
観光とブランド	P4	がんびょうへいゆ <small>にちしよう</small> 眼病平癒なら日朝さん	P24	コラム 不思議の池・浄の池 <small>じょう じゆけ</small>	P42
伊東市ブランド研究会について	P5	小田原の城や街を造った伊東の材木	P25	「イトウジン」として生きる	P43
伊東市ブランド研究会のミッション	P6	いえず <small>みうらあんじん</small> イギリス人ながら家康のブレーンに 三浦按針	P26	もっと知りたい伊東の歴史	P44
どんな価値を提供するか <small>かち ていきよう</small>	P7	えどじようほんまるごようたし 江戸城本丸御用達のボラは伊東から	P27	伊東に名を残す伊東祐親 <small>いとうすけちか</small>	
わたしたちの宝物 <small>たからもの</small>	P8	伊東からの石は江戸城の基礎となった <small>きそ</small>	P28	伊東氏と宇佐美氏	
これからの観光について	P9	産物を載せて船は江戸へ 伊東の産物が江戸を支えた <small>の</small>	P29	伊東の地と源頼朝 <small>みなもとのおりとも</small>	
歴史は何よりの宝物	P10	しょうぐんさま <small>い</small> <small>たる</small> 将軍様も癒やした伊東の湯 樽で運ばれ江戸へ	P30	伊東の巨木 <small>にちれんしんこう ほつけきよう</small> 日蓮信仰・法華経	
時層から宝物を掘り出そう <small>じそう ほ</small>	P11	新井のブリ	P31	伊東市の観光をブランドにするために	P47
伊東の価値	P12	かわな 川奈ホテル	P32	伊東市観光のプロジェクトに共通のシンボルを！	P48
時層から見つけた伊東市の宝物	P13	みかんの花咲く丘 <small>さ おか</small>	P33	ブランドロゴの紹介	P49
南の海から北上、本州に衝突して伊豆半島が誕生 <small>しやうとつ たんじゆう</small>	P14	おんせんきやく <small>およ</small> <small>もくぞうさんかいだ</small> 温泉客が押し寄せた松川地区の木造三階建て旅館	P34	ブランドロゴのプロポーシオン	P50
なぜ木が生えていないのか 大室山	P16	リゾート地 伊豆高原の誕生	P35	ブランドロゴのバリエーション	P51
海の神様はアワビがお好き？ 姥子神社 <small>うぼこじんじや</small>	P18	全国に伊東の名を知らしめたハトヤと温泉街 <small>おんせんがい</small>	P36	ブランドロゴのルール	P52
ちようてい <small>おさ</small> <small>あらかつお</small> 朝廷に納めた荒堅魚とは カツオと伊東	P19	テニス、スキューバダイビング……。人々は伊東を目指した	P37	ブランドロゴの展開	P53
朝日山から発見された平安の人々の祈り <small>いの きようつか</small> 経塚	P20	伊東の著名人 <small>ちよめいじん</small> <small>きのしたもくたろう</small> 木下空太郎	P38	伊東市ブランド研究会の紹介	P54
鉄それは権力の証 宇佐美氏と鉄の関わり	P21	伊東の著名人 <small>きたさとしばさぶろう</small> 北里柴三郎	P39	参考文献・写真提供・協力一覧 <small>さんこうぶんけん しやしんていききよう きようりよくいちらん</small>	P55
まなたいわ <small>にちれん</small> 俎岩に放置された日蓮を伊東の漁師が救った	P22	伊東の著名人 <small>とうごうへいはちろう</small> <small>わかつきれいじろう</small> 東郷平八郎 若槻礼次郎	P40		



観光とブランド



伊東市は44.7%が国立公園に指定されている
富士箱根伊豆国立公園地図(環境省)を参考に作成

静岡県伊東市は、44.7%が「富士箱根伊豆国立公園」に指定されている、国際的で美しい自然環境を有する観光都市です。また、伊東温泉という、全国的にもトップクラスの湯量を誇る観光資源を持つ伊東市の市民の多くは直接的、間接的に観光に関わって生活をしています。

わたしたち「伊東市ブランド研究会」は、伊東市の観光をブランドとして磨き上げ、市民の宝物として次世代につなげていくために設立されました。

わたしたちはまず、伊東市の価値を見直し、ほかにはない唯一無二の魅力を見出すところから始めました。わたしたちが思う観光ブランドとは、価値を提供する側＝伊東市と、提供される側＝観光客が「伊東市の魅力」について共通のイメージを持つことだと思っています。その見直し作業の成果をまとめたものがこの「伊東市観光ブランドブック」です。

ブランドは高価なものや美しいものでなければならないと思われがちですが、それだけではありません。

伊東市の観光をブランドとしていくには、市民それぞれが思っている価値をしっかりと言葉にすることから始め、それをどれだけ大切に思っているかを把握し、アイデンティティとして自覚することが必要です。

そのために、わたしたちは伊東市の過去を探り、観光に大切なものは何なのかを考えてきました。その過程でいくつもの伊東市の価値を見つけました。それは、「伊東市観光ブランド」の卵ともいえるものです。卵を基に、「伊東市民にとっての観光」の実現のためにどう行動すべきかを話し合いました。行動することで、伊東市を訪れる観光客と価値を共有できるはず。価値の共有、それこそがブランドを創り出すからです。

わたしたちの行動によって、伊東市が持っている価値を最大限に活かした未来のビジョンを作っていけたらと願って活動を始めました。この冊子がビジョン創りの契機となることを願っています。

伊東市ブランド研究会について

「伊東市ブランド研究会」は伊東市の観光に関係する人々や組織、外部の伊東市サポーターで構成されています。

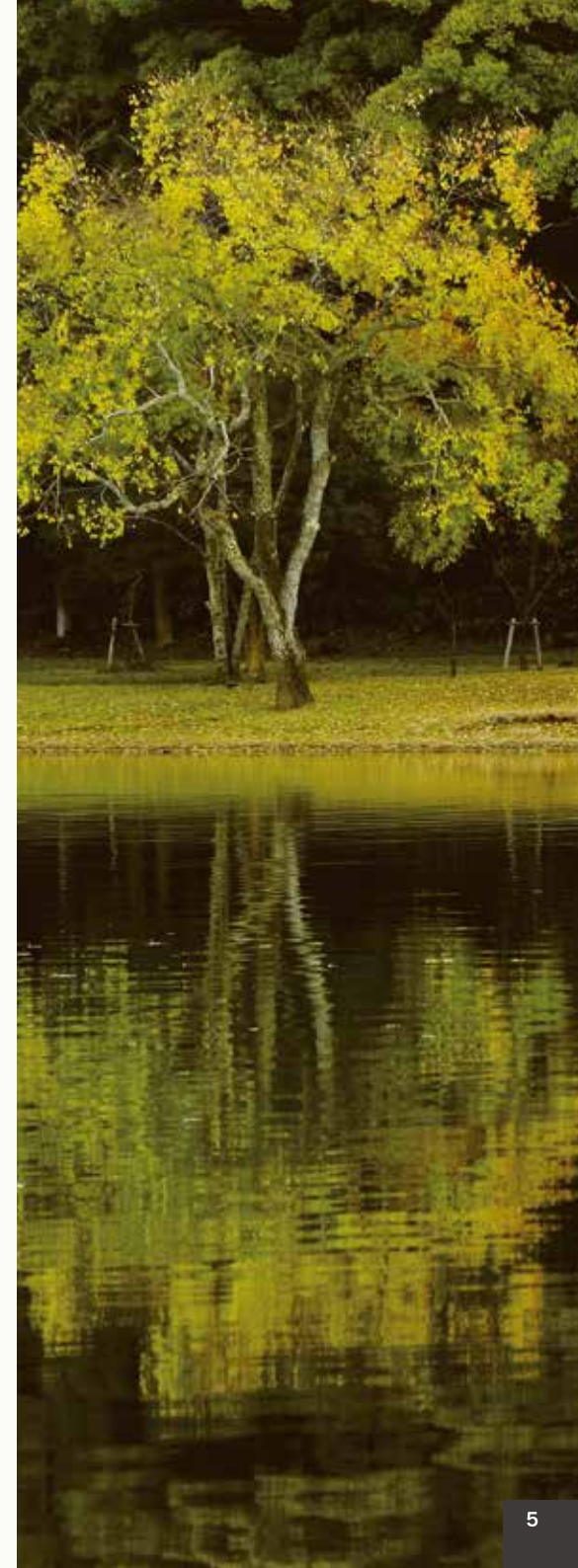
わたしたちはこれからの日本の中で、観光がどんな価値を持つのか、観光のスタイルはどう変化していくのか、その中で伊東市はどんな存在感そんざいかんを持てるのか、そもそも日本や世界の中で伊東市はどれほどの存在感を持てるのかなどについて真剣な話し合いを重ねてきました。

そして分かったことは、伊東市の観光ブランドの確立には、新しいものを付け加える必要はないということでした。伊東市民が日常の中みのがで見逃していたものの中に、実は人を引きつける素晴らしいものがたくさんあることに気がついた

のです。たとえばそれは古くから賑にぎわっている市街地の温泉だったり、大室山であったり、城ヶ崎の海岸地形といった当たり前前に伊東にあるもの、それが市民のよりどころであり、宝物だと分かったのです。

加えて分かったことは、伊東を愛する市民の心そのものがすでにブランドであるということです。その心があれば、市民は観光客に幸せを提供できるのだと気がつきました。

続いて、その宝物をどうすればもっと活かしていけるか、そのためにどんな活動をしていけばよいか、わたしたちは考えてきました。



伊東市ブランド研究会のミッション

改めて見直してみても気がついた伊東市の価値はたくさんありました。たとえば伊東市の景色、習慣、祭り、食などは、日常の中にあると普通のものにしか見えませんが、よその土地と比べてみて初めて、伊東市にしかない貴重なものであり価値であり、市民の誇りであると気づかされます。

そして伊東市が持つ歴史も重要な宝物でした。伊東市内には、何の目的で建てられたかが伝わっていない石碑や、なぜそこにあるのか知られていない史蹟がたくさんあります。その背景をもう一度掘り起こすと、伊東市の成り立ちが分かってきます。歴史の中に今につながる習慣や祭りの理由があることも多く、これもまた、市民の誇りにつながっていることが分かりました。

さらにもう一つ、伊東にしかない重要なもの。それは伊東市内のあちこちに暮らす「伊東市を盛り上げよう！ 未来を作ろう！」と考え活動している人々の存在です。

伊東の未来を良くしたいと思っている人をもっと増やし、わたしたちと一緒に伊東市のブランドを創っていくような動きを作りたい、そう強く感じました。

もしかしたら伊東が大好きな人たちもまた、強力なりピーターとなるでしょう。より多くの人々と、「伊東市の観光ブランド」を創っていくこと、それこそがわたしたちのミッションです。



どんな価値を提供するか



旅先でのきれいな景色、素敵なホテルや旅館、温泉、美味しい食事などは誰にとっても最高の思い出になるでしょう。だけど、それだけだったらどこでも体験できるともいえるのではないのでしょうか。

伊東市でしか体験できないことは何でしょうか。それは高額で高級という価値観とは違うところにあるように思います。

たとえば雨の中、道に迷って困っていたときに雨宿りさせてくれて、お茶まで出してくれたお土産屋さん。街を歩いていたなら「こんにちは！」と声をかけてくれた小学生。電車に乗り遅れそうなき、必死で車を走らせてくれたタクシーの運転手さん。「これは最高に美味しいよ！」と胸を張って料理を運んできたお店のご主人……。

土地の人の、旅人に対する温かい心のもてなしは忘れられない思い出になります。加えて、「自分は伊東市が大好き」という誇りが会話からにじみ出たら、「なぜそう思うのか」、旅人はもっと深く伊東市を知りたくなるでしょう。

その思い出はいつまでも残り「またあの土地を訪ねたい」と人を動かす原動力になるでしょう。それこそが伊東市観光のブランドではないのでしょうか。

温泉や山海の美味、見事な景観が揃った伊東市の観光に、自分の土地に誇りを持つ人の温かい心が加われば、日本のどこにもない極上の観光地となるはずです。これがわたしたちの考える次世代の観光です。

その実現のために何をしていくべきでしょうか。伊東市民やサポーターのみなさんとともに考えていきたいと思えます。



わたしたちの^{たからもの}宝物

わたしたちが見つけた伊東の宝物を記してみます。

宝物は「もの」ではなくて、人に幸せを^{あた}与えるものという
視点^{してん}から見つけてみました。

まだまだ整理中の、おもちゃ箱のような「要素」です。

人の和

- 子どもたちと仲良くなれる
- どんな人でも受け入れるまち
- 仕事や生活で帯電してしまったものを放電できる
- 家族^{きずな}の絆が再生できる

文化

- 多様性というより雑多感が心地よい
- 個人商店を大事にしている
- 駅前に全国チェーン店が少ない
- わかりづらい場所に名店がある^{おく}奥が深いまち
- 独自の食文化がある
- 昔ながらのスナック文化がある
- 入るのにちょっと勇気があるけどユニークな個人店が多い

暮らし

- 等身大の生活ができるまち
- 伊東の独特の時間の進み方^いで癒やされる
- 地方の正しい住まい方ができる
- 手頃^{てごろ}な癒やしが多くある
- 気を張らずに生活できる
- リトリートできるエリアがある
- 非日常にすぐに行ける
- すぐに自然を楽しめる



地の利

- 伊豆半島のエントランス（入り口）
- 伊豆半島の HUB の機能
- 首都圏^{しゅとけん}と 2 拠点^{きょてん}居住ができるまち
- 日本代表レベルの温泉があるまち
- 伊豆といえば伊東と思われる知名度
- 都会でも田舎でもない
- 首都圏^{おくざしき}の奥座敷
- 昭和の風景がまだ残っているまち



これからの観光について

もし、読んでいただいているあなたが伊東市民なら、伊東市の観光における価値をもっと上げるために、人と人のつながりを作ってみませんか。

わざわざ伊東市を訪れてくれた観光客に、ひと言あいさつしてみてください。

「こんにちは！」そして、にっこりと。

するときっと笑顔で「こんにちは！」という声が返ってくるはず。旅人にとって、このやりとりは忘れられない宝物です。

わたしたちは、美しくていねいな言葉づかいだけを優先するのではなく、人と人の距離を近くする、心が温まるコミュニケーションを大切にしたいと考えます。

ぎこちなくても、ひと言で親しみや幸せを、さらには伊東市の良さを感じてもらえるコミュニケーションは可能です。

そのためには、

- ・誠意を込めて
- ・優しく、
- ・自信を持って、
- ・「好き」という気持ちが相手に伝わるように。
- ・でも、ていねいすぎずに。

……そんな話し方で、観光客と会話を交わしていくことが大事です。きっと心が通い合うはず。です。

もちろん、発する言葉の中に伊東市への誇りと愛が入っていることも大切です。そんな言葉なら、相手にも気持ちが伝わり、伊東市の価値、ブランドは高まっていくことでしょう。



歴史は何よりの宝物^{たからもの}

「伊東市観光基本計画」には“リラックスできるまち・
いとう”と書かれています。なぜ伊東市は人を癒やせるの
でしょうか。

時層^{じそう}を掘り起こすことでそれが分かるかもしれません。
“まち”は突然現れたのではなく、何百年、何千年という
時が積み重なってつくられています。その時層を調べてい
きました。すると分かってきたことがあります。

伊東市はその立地、自然条件、景観、海山の豊かな恵み^{めぐ}、
文化、温厚な人々などが発する大きなパワーを持っており、
それが古代から現代まで、常に日本の中枢部^{ちゅうすうぶ}にいる人々や、
日本全体を「癒やし続け」「支え続け」てきたということです。
ときにその影響力^{えいきょうりよく}は海外にも及んでいました。

伊東市がなければ、今の日本はなかった、というのは言

い過ぎだとしても、伊東市という唯一無二^{ゆいいつむに}の存在があった
からこそ生まれた文化や思想、芸術があることは確かです。
奈良時代の朝廷^{ちやうてい}しかり、江戸城^{えどじやう}しかり、明治の文人や研究
者しかり。

伊東市では1999年（平成11）から伊東市史編さん事業
を開始し、多くの専門家や市民が協力して「伊東市史 史
料編」や「別編」「通史編」「市史叢書」などを刊行しました。

本書はこれらの書籍^{しよせき}を参考にしながら、「日本の中枢^{ちゅうすう}
の人々や組織を支えた伊東^{してん}」という視点に基づいて構成して
います。

現在の伊東市の魅力^{みりよく}は、歴史の積み重ねによる物語がつ
くりあげています。それこそが伊東市にしかない価値、また
宝物であるとわたしたちは考えました。



時層から宝物を掘り出そう

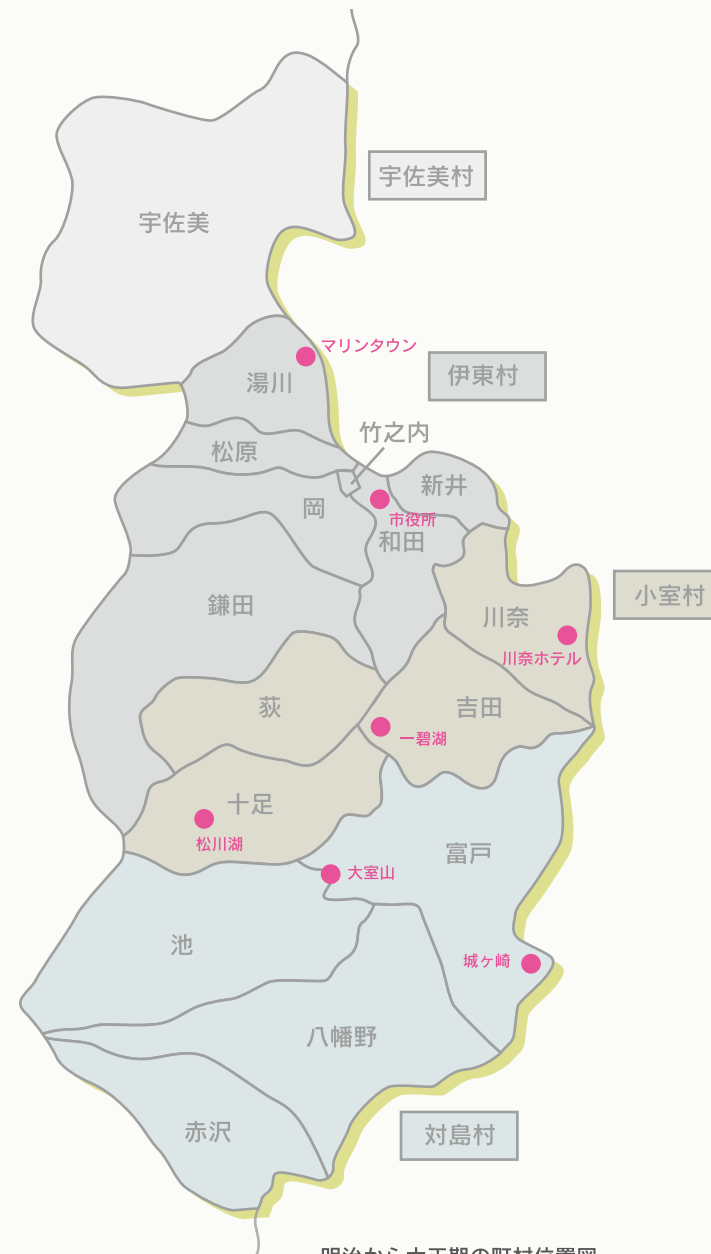
宝物は作ろうと思って作れるものではないし、欲しいと思っても手に入るものではありません。時間をかけてじっくりと、そして、本当に多くの人たちの思いが重なって宝物になるのです。なぜ、宝物になっていったか、経過を知ることは、その価値を理解して、価値に自信を持つことにつながります。

江戸時代に伊東という地名はありませんでした。宇佐美村、湯川村、松原村、和田村、竹之内村、新井村、岡村、鎌田村、川奈村、吉田村、荻村、十足村、富戸村、八幡野村、池村、赤沢村という16の村がそこにありました。

廃藩置県が行われた1871年（明治4）まで葦山県とされ、その後、足柄県となったのち1876年（明治9）に静岡県となりました。このとき、現在の伊東市は伊東、小室、対島、宇佐美の4つの村となり、のち、1906年（明治39）に伊東村は町になりました。さらにのちに伊東町と小室村が合併、その後宇佐美村と対島村も合併し、これらが1955年（昭和30）に1つとなって現在の伊東市となったのです。

16の村が存在していた時は、伊東市はこの世にありませんでした。この16の村が伊東市になるまでには、とても長い時間がかかっています。そこには、いくつもの面白い物語が存在し、それらの物語は、時層の中に埋まっています。

しかし、時折、今のまちに時層の中から物語が顔をのぞかせることがあります。それが、まちの宝物なのです。それを理解するために、時層をたどり、振り返ってみようかと思えます。



明治から大正期の町村位置図

※ピンク色の文字は現在の伊東市のランドマークです



伊東の価値

観光に携わる人々、そして伊東に暮らす人々はすべて、この地を訪れる人へのメッセンジャーです。発する言葉の背景に伊東への誇りと愛があることが伊東の価値を人へ伝える根拠となります。そこから訪れる人が考える伊東の価値とすり合わせる作業が始まります。

「こんなにおもしろい街に住んでいたんだ」

「こういうものがあつた理由、知らなかった」

「あの石碑は実はこんな背景があつたの？」

読んだ方に、そんな気持ちを引き起こさせたら望外です。そして人に話す時の種にさせていただいたらさらにうれしく思います。

語られ続けていくことで、種は芽を出し、やがてゆるぎない“伊東市の観光ブランド”を創っていくでしょう。

わたしたちから始まった種まきが、今度は伊東に住む人々みんなで行える作業になっていくことを心から願っています。



時層から見つけた伊東市の宝物

伊東市を深く知り、その価値を確認するために時層から物語を掘り起こしました。
3万年に及ぶ歴史の中に、この場所だけのかげがえのない宝物がたくさんありました。
次に伊東市を歩くとき、この宝物の物語を思い出してください。
今までと違う風景が見えてくることでしょう。



南の海から北上、本州に衝突して伊豆半島が誕生

丹沢山系や富士山にも影響を与えた“伊豆衝突”とは

相模灘と駿河湾に突き出した形の伊豆半島。伊東市はその東側に位置します。伊豆半島が今のように半島となったのは約60万年前と考えられています。実は、伊豆半島は数100万年もの時間をかけて、遠い南の海からフィリピン海プレートの北上に伴って移動し、本州の南部フォッサマグナと呼ばれる富士山周辺の地域に衝突したことでつながったのです。

もともとは現在の硫黄島（本州から約1100キロ南東）付近にあった海底火山の集合体が現在の伊豆半島でした。伊豆半島より以前の約500万年前頃には神奈川の丹沢山系が本州に衝突し一部となっていました。そこに現在伊豆半島となっている海底火山を載せたプレートが衝突し、プレートの表面に突起している火山群が剥ぎ取られて本州に押し付けられ、丹沢山系も圧力によって山並みを形成していきました。この衝突は富士山の形を作るのにも影響を与えたと考えられています。

こうして半島となった部分では、20万年前まではあちこちで噴火が続き、大型の火山（天城山や達磨山）が誕生しました。やがて大型の火山活動がおさまった約15万年前からは、単成火

山の活動が始まり、大室山などが誕生しました。伊東市は本州に衝突した海底火山の地層と、天城山などの大型火山や大室山などの単成火山といった陸上火山の地層が入り混じってできています。

伊豆半島の成り立ちや火山活動は、伊東の地に素晴らしい自然の恵みと絶景をもたらしました。大型火山の形成で作られた標高1000メートルを超える山地は雲を呼び雨を降らし、溶岩によって作られた複雑な海岸地形は地球が誕生した歴史をも垣間見ることができる貴重なポイントとなっています。

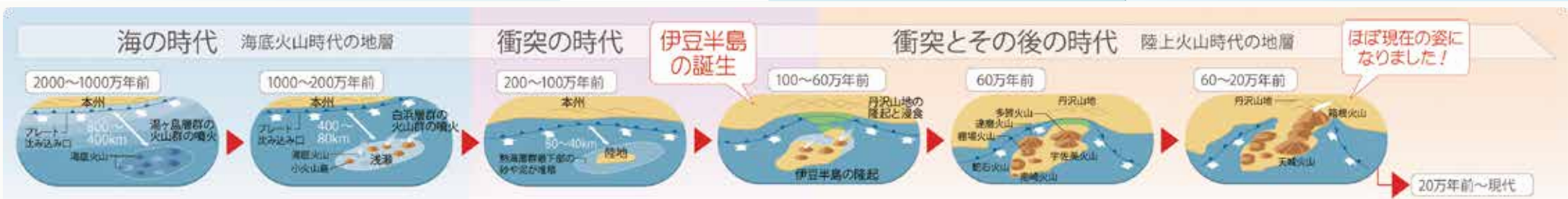
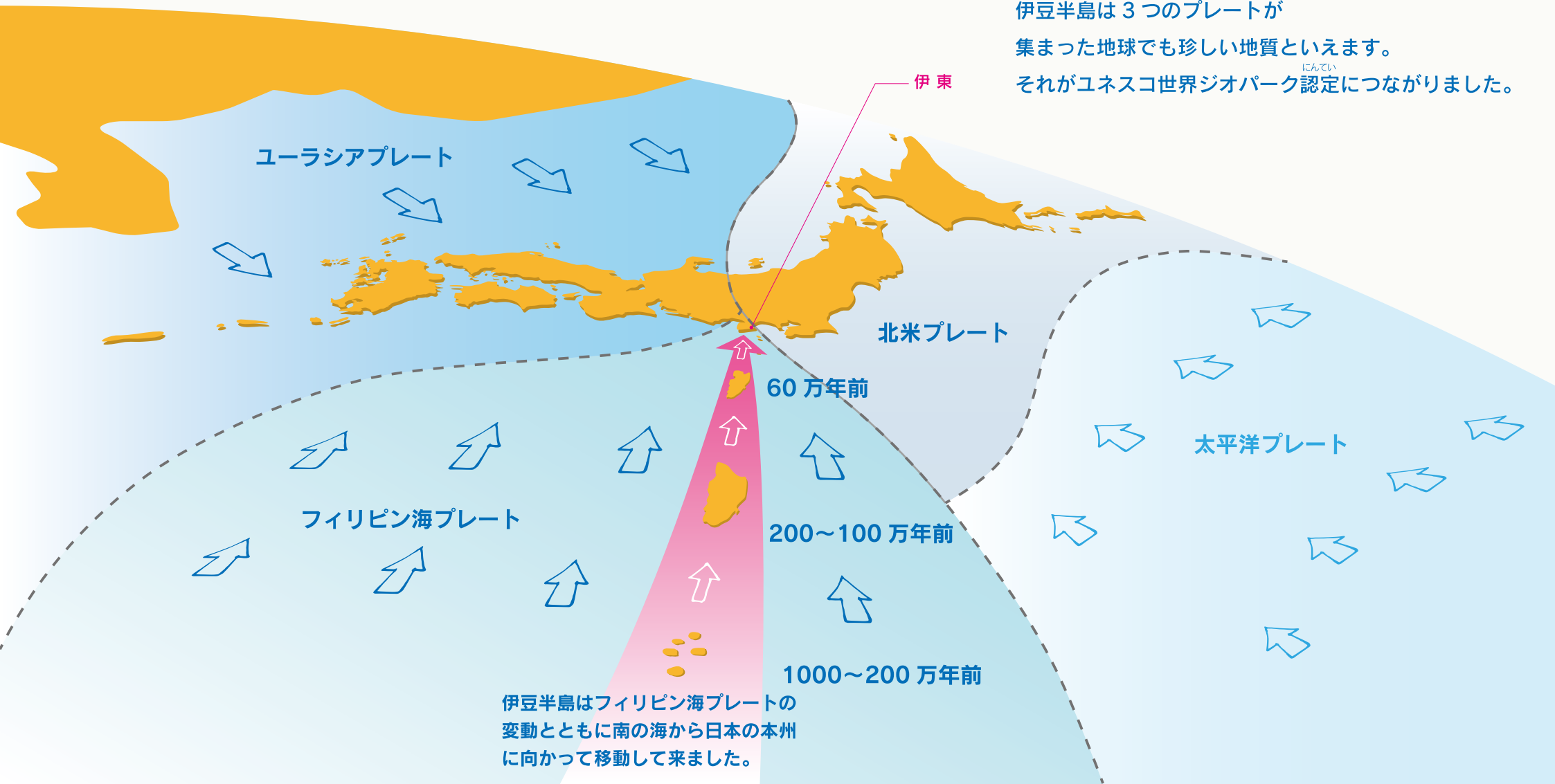
こうした成り立ちと景観は2018年（平成30）にユネスコ世界ジオパーク※に認定されています。伊東市には、小室山、大室山、城ヶ崎海岸、一碧湖や石丁場、佛現寺の津波碑など51カ所のジオサイトが点在しています。

※国際的に価値のある地質遺産を保護し、そうした地質遺産がもたらした自然環境や地域の文化への理解を深め、科学研究や教育、地域振興等に活用することにより、自然と人間との共生及び持続可能な開発を実現とすることを目的とするもの



伊東市全域に51カ所のジオサイトが点在しています

伊豆半島は3つのプレートが集まった地球でも珍しい地質といえます。
それがユネスコ世界ジオパーク認定につながりました。



なぜ木が生えていないのか 大室山

ゆい ひとつむに ほこ 唯一無二 伊東市民の誇り

お椀わんをふせたような形で、標高 580 メートルと決して高くはないですが、圧倒あつとつてき的な存在そんざい感かんで全伊東市民の誇りとなっている大室山。市民以外でも、姿すがたを見ればすぐに名前が浮かぶほど有名です。

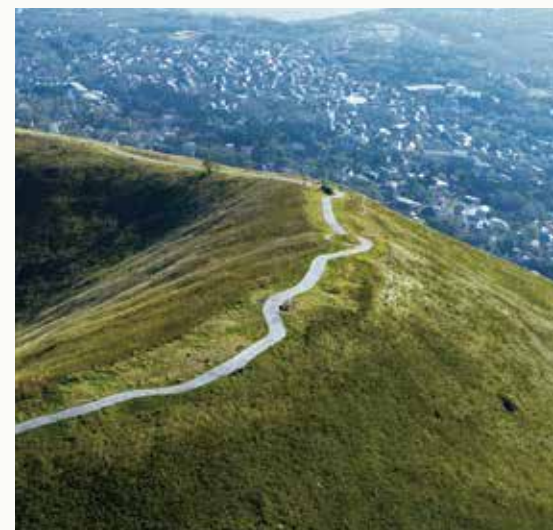
大室山は、実は 4000 年くらい前に起きた、ただ一度の噴火ふんかでできた山たんせい（単成火山かざん）です。粘り気のない溶岩ようがんが吹き上がり積み重なってできたスコリア丘ねばです。この噴火の際さいに流れ出た溶岩は、城ヶ崎海岸に見られる柱状節理ちゆうじょうせつりなど珍しくダイナミックな景観けいかんをも作り出しています。

大室山は景観だけではなく人々の生活の一部として活用されてもいました。その一つが山かやに生えている茅かやの利用です。大室山の茅は、屋根ふを葺くたいひ、堆肥たいひにする、牛馬えさの餌えさに使うたから、俵たからを作るなど生活のあらゆる場面で使われていました。当時の人々は茅を育てる場かやば（茅場）をいくつか作り、

大室山もその一つだったのです。雑草や木が生えると良質な茅を取りづらくなるので、毎年茅の根を残し地上の草をすべて焼き払う山焼きが行われてきたのです。

しかしだんだんと生活の中で茅を使うことも少なくなり、昭和 30 年代を最後に山焼きとたは途絶えしました。しかし、この山と伊東の歴史や観光財産としての大室山を大切に思う池地区の人々が「大室山山焼き保存会ほそんかい」を結成し、1980年（昭和55）から観光行事として山焼きが行われるようになり、現在まで続いています。

古くからのやり方を守りながら、最大の安全対策を取り行われる山焼きは、その勇壮ゆうそうさも毎年約3万人もの人々が訪れる一大行事となっています。その陰には、大室山が心のよりどころであり、また誇りとして大切に思う伊東市の人々の努力があるのです。



頂上には噴火口に沿って道があり、お鉢めぐりができる



山焼きが開催されると春になると言われるように季節行事になっている



地域：伊東市南部 時代：古墳

癒やされた対象：海神



海の神様はアワビがお好き？ こぶん 古墳時代から人々に使われ続けた海食洞穴 かいしょくどうけつ

川奈の海岸に姥子窟と呼ばれる海食洞穴があります。幅約30メートル、奥行き約20メートル、高さ約7メートルという大きなものですが、この洞穴はかなり昔の時代から人間に利用されてきたことが分かっています。2001年（平成13）に行われた伊東市史編さん事業のための調査では、縄文時代に人々が使っていたであろう黒曜石の破片が発掘され、さらに古墳時代前期の土師器が発掘されました。これは高坏といわれる祭祀などに使われる器で、同じ地層からは巨大なアワビの殻が54個、そのほかにもカツオ、ウミガメ、トコブシ、サザエなどのほか、牛の骨も見つかりました。アワビはすべて火で焼かれた形跡がありました。調査の結果から、この海食洞穴は古墳時代には神を祀る場所として使われ、アワビその他の食物は、海の神に捧げた熟餛（調理された供物）だったのだらうと考えられています。

現在、姥子窟の手前には姥子神社があり、これは「豊玉姫命」という海神を主神とする神社でした。川奈で海に関わる仕事をしている海士や漁師は豊漁や安全をこの神社に祈ったといっています。海とともにあった伊東の人々にとって、神聖な場所であったのです。いったい古墳時代にこの海食洞穴でどのような祭祀が行われ、人々は何を祈り、海を眺めたのでしょうか。今も姥子窟の最奥部には姥子神社の社が祀られています。



川奈にある姥子窟の姥子神社 金子浩之氏提供



出土したアワビの殻 金子浩之氏提供



遠方からの景色。海岸にある洞が姥子神社

地域：伊東市宇佐美・玖須美 時代：奈良

癒やされた人：朝廷



ちようてい おさ あらかつお 朝廷に納めた荒堅魚とは

人々に食べ続けられ愛され続けた魚・カツオと伊東

縄文時代にすでに食べられていたことが分かっている魚の一つにカツオがあります。古墳時代には、干したり火を入れたり煮た汁を調味料にしたりなど、さまざまに使われ、食べられてきました。

飛鳥時代の701年（大宝1）に制定された大宝律令には、賦役令の中に朝廷への調（官物＝税）とする物品の中で重要なものとして堅魚が記載されています。堅魚とはカツオを素干しにしたもので、古墳時代にはすでに作られていました。海の幸に恵まれた伊東でもカツオ漁は盛んだったことでしょう。そしてその堅魚を朝廷に納めた記録も残っています。平城京跡から見つかった、各地から調を納めたときに使った荷札代わりの木簡に「伊豆国久寝郷（くすみ）」の地名が記されたものがあるのです。これは、735年（天平7）に伊豆国田方郡久寝郷から、荒堅魚十一斤十両／七連二節を納めたという記録でした。荒堅魚とは、カツオを塩水などにつけて塩漬けにしたものといわれています。

カツオは今も日本人にとって欠かせない魚類です。そして、現在静岡県はカツオの漁獲量全国1位となっています。伊東では2017年（平成29）の漁獲量はイワシ類が最も多く、カツオ類は7番目となっていますが42トンの水揚げがあり、今も人々の舌を楽しませ続けています。

地域：伊東市街地 時代：平安

癒やされた人：庶民



朝日山から発見された平安の人々の祈り

経塚

56億7000万年後の説法のためにお経を埋めた

東林寺裏にある山から地中に埋められた壺や鉢、和鏡、水晶の念珠玉、合子（蓋付きの容器）や短刀などが出土したのは1908年（明治41）のことでした。これは全くの偶然で、三十三観音石仏を移動させるための測量作業中に、海岸にしかないような礫が出たため、不思議に思った作業員が発掘して発見されたのです。

これは経塚でした。経塚とはその名の通りお経を埋めた塚です。平安時代半ば、自然災害が多いことや社会の荒廃は末法に入ったためと考えられました。そして、釈迦の死後から時が経ち、教えは残っていても悟りを得るものはいないという末法思想が広がりました。しかし、末法の世から56億7000万年後には弥勒菩薩が現れて説法し、人々を救うといわれています。経塚はそ

の際に使う経典を埋めた未来に向けた祈り、また作善（仏縁を結ぶための行為）が形になったものといえます。

経塚は日本各地にあります。だいたいは経典を竹の筒や陶器の筒などに入れたため、経典そのものは残っていないことが多く、朝日山経塚では経典と一緒に埋めたのであろう副葬品の品々が遺されていました。

発掘された出土物はすべて東京国立博物館に収蔵されています。博物館のデータベース（右下参照）では、その出土物の写真を高画質で見ることができます。和鏡（桜花双鳥鏡）は、調査により12世紀に京都で生み出された最新の技術を用いた工芸品であることがわかっており、細工の美しさに驚かされます。



朝日山経塚の前にある東林寺



東京国立博物館に収蔵されている出土品
出典：colbase (<https://colbase.nich.go.jp>)

地域：伊東市宇佐美 時代：平安～鎌倉
癒やされた人：庶民



鉄けんりょくそれは権力の証 宇佐美氏と鉄の関わり

製鉄めくの条件に恵まれた宇佐美に今も残る製鉄遺跡いせき

かつて、鉄は権力や近代化の証とも言えました。武器として、道具として、鉄が生まれたことで人間の生活は飛躍ひやく的に進歩したのです。諸説ありますが、日本では弥生時代から製鉄が行われたといわれています。伊豆半島にはいくつかの製鉄遺跡があり、伊東市内には9カ所あります。これらは宇佐美に集中しています。製鉄には熱で溶融させて鉄を取り出す砂鉄と、燃料となる木炭、炉を作る耐火粘土たいかねんどが必要ですが、宇佐美にはこの3つが揃っていたのです。

宇佐美の金草原遺跡かなくさばらいせきでは、地中から2メートルもの鉄滓てっさい（鉄にならなかつたくず）の層が発見されています。燃焼を激しくさせるために風を送ったふいごの羽口はぐち（ふいごから炉に風を送り込む管）も見つかっており、当時の人々が何をふく作っていたのか想像が膨らみます。

この製鉄施設は誰が何のために作ったものか、現時点では分かっていませんが、ここから発掘された陶磁器の様子から平安時代末期～鎌倉時代初期に作られたものであり、当時、宇佐美で一番の権力者といえば、伊東氏と並んで幕臣ばくしんとして活躍していた宇佐美氏であることから、宇佐美氏すいさつが関わっていた可能性が高いのではと推察されていますが、正確なことは今後の調査を待つばかりです。



伊東市文化財管理センターに展示されている製鉄炉



俎岩に放置された日蓮を伊東の漁師が救った

伊東に残る日蓮宗の開祖・日蓮の足跡

1253年（建長5）に32歳で日蓮宗を立教開宗した日蓮は、伊東とも深い関わりがあります。「立正安国論」で災害や疫病などは民衆や幕府が間違った信仰をしているからと記したことで幕府から流罪を言い渡され、鎌倉から伊東へと流されたのです。伊東ではさまざまなエピソードがあります。地頭であった伊東朝高（伊東八郎左衛門）は、幕府から日蓮を監視するよう言われていましたが、大病で寝込んでいたときに日蓮の祈祷で回復したため、感謝の証に海から引き上げた金色釈迦仏を差し上げたそうです。日蓮はこれを大切に、常に身につけていたと言われています。朝高の館跡には佛光寺が建てられ「日蓮聖人祈祷靈驗之地」という案内が今も建っています。祈祷のあと、朝高が日蓮に屋敷内の毘沙門堂を提供し、

日蓮はここで流罪の3年間を過ごしながらいくつもの書物をかきあげました。この毘沙門堂跡は佛現寺となっています。

また、海上の俎岩に置き去りにされた日蓮を助けた船守・弥三郎夫婦はしばらく岩屋に日蓮を匿ってお世話したと伝えられています。弥三郎夫婦の墓は日蓮像とともに蓮慶寺に祀られています。

法華経を唱えることを至上とし、誰もが悟りを開くことができるという日蓮の教えは徐々に広まり、多くの人々の心のよりどころとなっていきました。

俎岩がどこにあったのかは正確には分かっていませんが、川奈にある俎岩には海に向かい立つ日蓮の像が建てられています。



川奈の海に立つ日蓮の像
金子浩之氏提供



伊東朝高の館跡に建つ佛光寺 出典：『図説伊東の歴史』



昔の絵ハガキの俎岩
八幡野・山川氏寄贈



流罪となった日蓮が置き去りにされた地に建つ蓮着寺



日蓮を助けた夫婦の住居跡に建つ蓮慶寺

地域：伊東市全域 時代：鎌倉

癒やされた人：全国民



歌舞伎でも有名な『曾我物語』と伊東氏・河津氏

とうりんじ そがきょうだい くびづか なら
東林寺には今も曾我兄弟の首塚が父の墓の横に並ぶ

鎌倉・室町時代に伊東の地で勢力を持ち領地を保有していた領主には狩野氏、伊東氏、宇佐美氏が知られていました。宇佐美氏、伊東氏は鎌倉幕府の御家人として活躍し、鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』にもその様子が記されています。中でも源頼朝の側近として活躍した武将に工藤祐経がいます（工藤姓ですが同じ藤原氏の流れをくむ一族です）。工藤祐経が広く知られているのは、日本三大仇討ちの一つであり歌舞伎の演目として全国の人々の涙を誘った『曾我物語』の主要人物でもあるからです。

『曾我物語』は曾我兄弟（曾我十郎祐成と曾我五郎時致）が、所領争いが原因で父である河津三郎祐泰を暗殺した工藤祐経を恨み、18年後に仇討ちを果たすが、兄（十郎祐成）はその場で打ち取られ、

弟（五郎時致）も処刑されてしまうという物語です。悲劇的な物語は日本人の情感に広く訴えかけ、江戸時代には歌舞伎の演目としても大変人気を博しました。

『曾我物語』は伊東はもちろん、神奈川県小田原市や静岡県富士市なども登場するため、各地にゆかりの記念碑や墓などが残されています。伊東には、東林寺に曾我兄弟の首塚と父である河津三郎祐泰の墓があり、今も参拝者が訪れています。江戸時代には八幡野の名主であり御典医でもあった肥田春安によって『曾我物語』に登場する名所の版画が作られ、観光客を喜ばせたそうです。現代では、NPO法人伊東市文化財史蹟保存会の手による『伊東本曾我物語』が2011年（平成23）に出版され、市民の間で話題になりました。



江戸時代の浮世絵画家 歌川広重の描いた『曾我物語圖會』



河津三郎祐泰が落命したといわれる所に建立された血塚（八幡野）



東林寺には河津三郎祐泰と曾我十郎祐成と五郎時致兄弟の首塚が並んでいる

地域：伊東市宇佐美 時代：室町

癒やされた人：目が悪い人



眼病平癒なら日朝さん

夢のお告げで見いだされた身延山久遠寺貫主・日朝は眼病守護の神

日朝（1422～1500）は日蓮宗の総本山である身延山久遠寺の第11世貫主を務めた名僧です。生まれは宇佐美で、8歳のときに三島本覚寺の開祖・日出という僧に師事して仏の道に入りました。この出会いは不思議なきっかけで、ある夜、日出の夢に日蓮が現れ「我を見んと欲せば、宇佐美の郷に行け」とお告げを受けたのです。そこで宇佐美に出向いたところ日朝と出会い、弟子にしたということです。

日朝は修行を重ね、1462年（寛正3）身延山久遠寺の第11世貫主となります。当時の久遠寺は信者が参拝するには不便な場所にあり、狭くもあつたため、身延町の現在の場所に移動させ、門前町も整備したところ、多くの信者が通えるようになりました。当時、衰退しかけていた身延山は日朝により中興され、日朝は身延山久遠寺の中興の祖として弟子や信者から篤く信頼されたといえます。

伊東には日朝の生家「妙秀山朝善寺」があります。毎年初夏にはホテルの観賞会も開かれ、地域のみならず観光客にも愛される寺として知られています。

また、日朝は眼病守護の神ともされています。日朝は心身を宗門興隆に捧げ尽くす生活を送るうち、61歳のときに

両目を失明してしまうという不運にみまわれます（幼児期という説もあり）。しかし「自らの不徳」としてさらに修行に励んだところ、なんと眼病が治ったそうです。その経験をもとに『眼病消滅本尊』を著し、「後世、法華経を信仰する人々が眼病に苦しんでいたら守護して平癒させる」と願を立てたということにちなんでいます。

日朝に由来する寺院は全国にあり、眼病平癒のお守りやお札を頒布する寺院も多く、眼病に悩む人の支えになっています。



妙秀山朝善寺の日朝坐像



妙秀山朝善寺の絵ハガキ 昔から名勝地として有名だった

地域：伊豆山間部 時代：戦国

癒やされた人：小田原・鎌倉



小田原の城や街を造った伊東の材木

天城山はじめ伊豆の山から伐採された材木が造る都市

戦国時代に北条氏が勢力を拡大すると、城下町となった小田原はにぎわいを増し、北条氏の臣下や町民にも建築材料としての材木の需要が高まりました。このとき、北条氏は伊豆から材木を調達したようです。天城山（狩野山）や伊東山で伐採された材木は伊東まで運ばれ、港から船で小田原に運搬されたそうです。北条氏が治めていた時代、小田原は都市として拡大し、伊豆半島全体が重要な材木の供給源となっていたようです。このため、一般庶民の伐採は禁じられ、狩野山奉行だった大川神左衛門尉父子がしっかりと材木を管理していたようです。

これはもっと以前の時代から変わらず、源頼朝が開府した鎌倉時代には、鎌倉が政治の中心となったため、都市が形成されました。この時代にも伊豆半島は材木を採る重要な場所の一つでした。『吾妻鏡』にも「頼朝は伊豆国へ赴いた。これは新規に建立する寺のため、日頃材木を調達している狩野山を観察するため」と書かれています。猪野山の伽藍や神宮寺、鶴岡若宮（鶴岡八幡宮）のために集めた材木は、伊豆からも調達されたと考えられています。

伊東は港があり、また背後の山が豊かである上にそこには杉・檜が多かったため、1343年（康永2）静岡市清水区の久能寺が焼失から再建を目指したときも狩野山周辺から材木を切り出し、船筏で運んだことが『久能寺縁起』に記されています。



小田原の城下町も伊豆の材木で造られたと考えられる



静岡市清水区にある久能寺も伊豆の木材で造られている



鶴岡若宮（鎌倉鶴岡八幡宮）

地域：伊東市街地 時代：江戸

癒やされた人：徳川幕府



イギリス人ながら家康のブレーンに 三浦按針

日本発 洋式帆船の誕生は外国人指導のもと伊東で完成

1564年（永禄7）にイギリスで生まれたウィリアム・アダムスは、日本名を三浦按針といます。1589年（天正17）にオランダの「リーフデ号」その他4隻の船が極東探検のために乗組員を探していることを知り参加したところ、数々の病魔や事故のため苦難の航海を強いられ、1600年（慶長5）に台風にみまわれ豊後臼杵に漂着します。謁見した徳川家康はアダムスの人柄と語学力、航海術などの知識を気に入り、日本に住まわせます。そして外国使節との交渉の通訳なども依頼し、重用します。

さらに造船の知識も持つアダムスに洋式の帆船を作るよう命じます。アダムスは松川の河口に砂ドック方式を取り入れて80トンの洋式船を建造し、1604年（慶長9）に完成させます。この様子は三浦浄心の『慶長見聞集』に「伊豆の国伊東と言う浜辺の在所に川あり。是こそ唐船作るべき地形なりとて、其の浜の砂の上に、柱を敷き台として其の上に舟の敷を置き、半作りのころより砂を掘り上げ、敷台の柱を少しずつ下げ、堀の中に舟を置き、此の舟海中へ浮かべる時に至って、河尻を堰きとめ、其の河水を舟の有る堀へ流し入れ、水の流れを持って、海中へ押し出す」と書かれています。ついで120トンの船も建造させました。

この功績をたたえて、家康は、250石の旗本として領地を与え帯刀も許します。日本で初めての外国人の旗本誕生です。アダムスは、家族のいるイギリスへ帰ることなく、家康亡き後には長崎・平戸へ移り、波乱の生涯を終えました。



三浦按針ことウィリアム・アダムス
画像はパブリック・ドメイン



伊東市役所に展示されている三浦按針の指導で造った洋式帆船
サン・ブエナ・ベントウラ号の模型



右手前が三浦按針（ウィリアム・アダムス）が乗っていたリーフデ号
画像はパブリック・ドメイン

地域：伊東市南部 時代：江戸

癒やされた人：徳川幕府

江戸城本丸御用達のボラは伊東から

村総出で漁が行われたボラは名産品でもあった

今ではあまり食べられなくなってしまったボラですが、江戸時代から昭和30年代あたりまで、各地の沿岸で漁が行われるほど主要な魚でした。富戸でもボラ漁が盛んで「富戸のボラは味が良い」という定評があり、江戸城本丸や西丸へも納めていたほどでした。

江戸時代、人々はどのようにしてボラを食べていたのでしょうか。献上されたボラは儀式の場などで焼き物として出されたようです。一般の人々は、なますや和え物、田楽などでもボラを味わっていたようです。

ボラ漁は魚見小屋と言われる見張り小屋を設置し、漁期には4人1組で泊まり込み、ボラの大群が回遊してくるとほら貝を吹いたり旗を振るなどして合図しました。合図を受けて村人は総出で出漁します。漁は紀州から伝わった八艘張網という漁法で網に群れを追い込む形で捕獲していたそうです。ボラ漁は昭和30年代を境に全国的に行われなくなりましたが、富戸には魚見小屋が残り、1955年(昭和30)に静岡県ゆづけいみんぞくぶんかざいの有形民俗文化財に指定されました。この際、激しかった破損箇所かしよ ほしゅうを補修しました。今もその姿すがたを離れた場所から見ることができます。

またボラ漁に使用する大量の網や道具類を収納していた納屋は漁の拠点として「ぼら納屋」と呼ばれていました。残念ながらこちらは現存していません。復元された建物が海鮮料理の店として利用されています。



ボラの回遊を見張った富戸の見張り小屋(県指定有形民俗文化財)
写真：『図説 伊東の歴史』より



ボラは出世魚で鰯(ボラ) から鰯(トド) に変わる。鰯(トド) 以上に成長しないことから、これが「とどのつまり」の語源になった



富戸のぼら納屋 対島村役場撮影 金子浩之氏提供



富戸の見張り小屋

地域：伊東市宇佐美 時代：江戸

癒やされた人：徳川幕府

伊東からの石は江戸城の基礎となった

刻まれた刻印が江戸時代を物語る石丁場

宇佐美の中心集落北側にあるナコウ山に「羽柴越中守石場」と刻まれた石があります。羽柴越中守とは戦国～江戸時代に活躍した武将・細川忠興のことです。この文字が刻まれたのは慶長年間です。これは、徳川家康の命によって、各地から江戸城石垣を築くための石を供出させたときの刻印なのです。

徳川家康は1603年(慶長8)に江戸に幕府を開きました。江戸城は以前からあった城でしたが、家康の開府後、史上最大の城郭として築城するため、家康から將軍3代にわたり西日本の大名に石を送らせました。この時代には江戸城の他にも名古屋城、丹波篠山城などの修築に大名が集められました。これを「御手伝普請」と呼びます(のちに『天下普請』ともいわれました)。

伊豆半島は“伊豆石”という良質な石を産出していたため、各地の大名が石を切り出しました。刻印は、採石した大名を示したり、現地での採石者を示すために刻まれたといわれています。その採石場所が今も石丁場として残っており、宇佐美のナコウ山の石丁場(宇佐美北部石丁場群)は、2016年(平成28)に国指定の史跡に指定されています。「羽柴越中守石場」の文字がある石は山頂近くですが、中腹には稲葉家や毛利家などの刻印石も見られます。伊東市には約85

の石丁場が残っているとも言われていますが、同じ石丁場でも違う時期に異なる大名が石丁場として使われていることもあり、正確な数はよく分かっていません。

伊豆石は主に2種類あり、安山岩系の硬い石と凝灰岩系の軟らかいものがあります。江戸城の石垣に使われたのは安山岩で、この石を切り出して運び出し、3000隻もの石船で江戸まで運んだと言われています。すべて人力の大変な作業でした。江戸城は明暦の大火で天守閣まで焼失していますが、火災に強い伊豆石は残り、昭和期の空襲でも残りました。江戸城の石垣は9割以上が伊豆石でできており、今も石垣として残っています。



刻印された江戸城の石垣用の石



羽柴越中守石場の文字が刻まれた石



富戸の横磯海岸もかつて石丁場で今も跡が残る



地域：伊東市全域 時代：江戸

癒やされた人：江戸の人々



産物を載せて船は江戸へ 伊東の産物が江戸を支えた

豊かな自然の恵みは江戸でも大人気だった

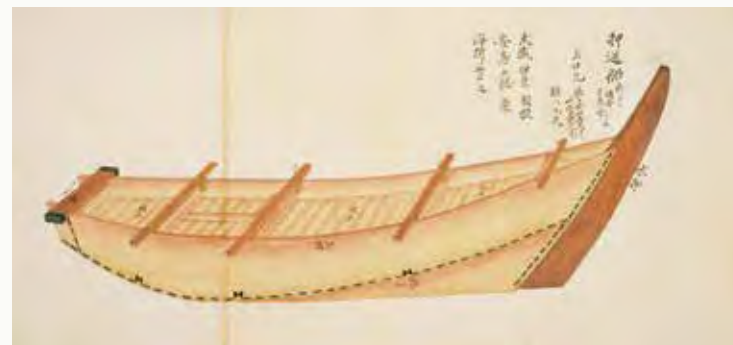
江戸時代、伊東は16の村に分かれていました。それぞれ、海や山からの産物を江戸へ出荷していましたが、その内容を見ると、山からの恵みは、人気商品だったヤマモモや、薪まきや炭すみ、材木、板、わさび、椎茸しいたけ、お茶、柴胡さいこ（生薬の原料）などとなっています。海からの恵みはいけすを造った押送船おしおくりで、アワビ、イセエビ、ナマコ、タイなどの活魚を出荷したほか、加工品も多く出荷されました。和田村や新井村には魚を仕入れる問屋があり、船を持ち江戸へ送る廻船問屋かいせんだんもありました。海辺の村は、山間部の幸を仕入れ、海産物とともに江戸へ出荷するようになっていきました。美食を求める江戸の人々の要求に応えるとともに、売上をあげることが物流ルートを作る一方、商取引の仕組みも作られ、また製造業の仕組みも作られていったのです。

もちろんこの時代には伊東だけではなく、全国各地からさまざまな産物が江戸に送られていましたが、山海の幸に恵まれた伊東の品々は、1721年（享保6）には50万人に膨れふくれ上がっていた江戸の人々の食欲を満たし続けたことでしょう。



押送船は葛飾北斎（江戸時代の絵師）の「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」にも描かれている。

この押送船は房総や伊豆から江戸へ鮮魚などを運んでいた



伊豆のあたりで使われていたという押送船

出典：船鑑（明治6年出版）国立国会図書館デジタルコレクションより

地域：伊東市街地 時代：江戸
癒やされた人：幕府の要人、江戸の庶民



しょうぐんさま い 将軍様も癒やした伊東の湯

たる え ど 樽で運ばれ江戸へ

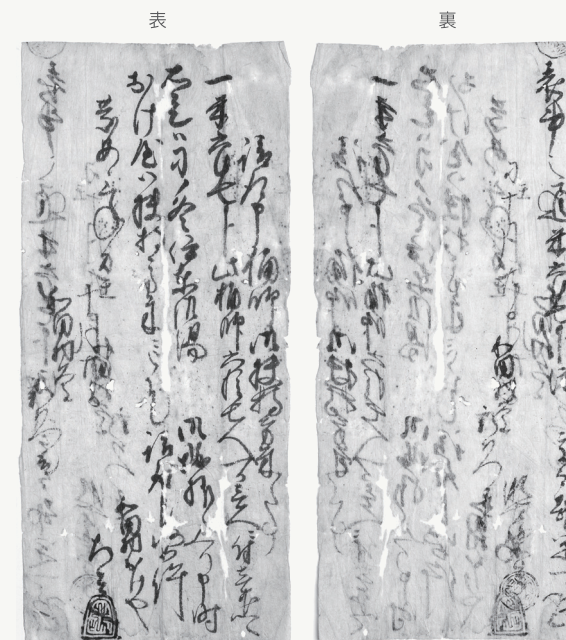
今も昔も 人々は伊東の温泉で温まった

伊東の市街地には江戸時代から有名な温泉が湧出していました。「いとうの湯」という呼び名で知られています。徳川家康の側室・養珠院 妙紹日心大姉（お万の方）は、日蓮の霊蹟を訪ね歩くために伊東に滞在した際に湯に入りに来たとも伝えられています。1648年（慶安3）は三代将軍家光の時代ですが、この頃、樽に湯を詰めて江戸城へ送った記録も残っています。これは一説には、養珠院妙紹日心大姉（お万の方）が家光に献上したのではないかと考えられています。

温泉として特に有名だったのは竹之内村地内の「和田湯」で、1811年（文化8）に温泉地の利用を巡って竹之内村と和田村の間で争論が起こっていますが、それほど重要な資源となっていたのでしょう。

太平な時代が続いた江戸では、やがて上級階級のみならず庶民も湯治で温泉場へ行くことが楽しみの一つとなり、関所を越える移動には「湯治願い」を出して3週間ほども滞在したといわれています。さらには将軍だけではなく庶民も樽に詰めて取り寄せた各地の温泉を楽しむことが流行し、伊東からも「豆州湯河原温泉」（神奈川県の湯河原とは別）という名称で出荷されたそうです。

江戸時代には料理や宿などさまざまな「番付」をするのが流行り、温泉番付も作成されました。番付にはいろいろなバージョンがあったようですが、豆州湯河原はいずれも前頭以上に記載され、当時から人気が高く、温泉好きだった日本人を癒やしていたことがうかがえます。



『請取申桶師御扶持持米之事』
伊東の湯を御城に上げるため桶師に御扶持米が支給されたことを示す
〔玖須美区有文書 W-2〕

地域：伊東市街地 時代：明治・大正
癒やされた人：日本橋魚市場・東京の庶民



新井のブリ

新井からの数万匹のブリが日本橋魚市場を狂喜させた

伊東は昔から漁場に恵まれ、マグロ、ブリ、カツオ、アジ、サバ、エビ、アワビ、サザエなどの漁が盛んでした。漁民たちはそれぞれの魚の特性や、海中地形に合わせて棒受網漁や地引網漁、延縄漁など漁の仕方を変え、その形態は江戸時代にはすでに確立していたようです。魚は五十集と呼ばれる海産物専門の商人が買い取り、廻船問屋が船で江戸に送るという形で出荷されました。漁場は地域で決まっていたが、時には他地域の船が越境し、争いになったこともしばしばだったようです。漁村にとってはそれだけ大きな収入源だったのだでしょう。

地域の中でも新井は江戸時代から主要な漁場でしたが、明治・大正期、定置網に一夜にして数万匹のブリがかかって大賑わいになったという記録があります。新井ではカツオ漁が盛んでしたが、このときは突然ブリがやってきたのです。思いがけない海からの贈り物に、人々は沸き返りました。今も新井の海岸にはこのできごとを記した記念碑二基があります。日本橋の魚問屋も名前を記すこの記念碑から、大量のブリが日本橋魚市場に出荷され、新井の人々の収入となり、東京では人々が美味しく舌鼓を打ったであろうことが想像できるのです。



新井のブリの大漁 竹田信一氏提供

地域：伊東市南部 時代：昭和
癒やされた人：国内外のセレブリティ

川奈ホテル

ノブリス・オブリージュ※の具現化で誕生した極上空間

1936年（昭和11）に開業した川奈ホテルは、大倉財閥の二代目であり、ホテルオークラの創業者でもあった大倉喜七郎によって建設されました。設計は学士会館や日本橋高島屋を手掛けた著名な建築家・高橋貞太郎です。大倉は、もともとは乗馬ができる牧場を作るつもりでしたが、溶岩台地が馬の蹄に良くないことを知り、ゴルフコースに変更します。富士ゴルフコース（チャンピオンコース）は米国ゴルフマガジン誌『世界ゴルフ100選』に選ばれています。

大倉は国際的にも通用する、本格的なリゾートホテル建設を目的に川奈ホテルを造りました。その狙いの通り、国内外の賓客が多く滞在しています。1954年（昭和29）には、新婚旅行で日本を訪れたマリリン・モンローとジョー・ディマジオも滞在しました。また、昭和天皇も皇后と足を運ばれましたし、スウェーデン国王夫妻も川奈ホテルを訪れました。

政府要人もよく利用し、1955年（昭和30）には当時首相だった鳩山一郎が静養、1998年（平成10）には当時の首相・橋本龍太郎が当時のロシア大統領・エリツィンと会談する場所にも選ばれました。

創業以来、格調高い英国調の空間は今も変わらず、冬にはゲストを温かく照らす暖炉は今も灯り続け、BGMも流れない静謐な空間に人々が癒やされ続けています。

本館は国の登録有形文化財に登録されています。

※身分の高い者はそれに応じて果たさねばならぬ社会的責任と義務があるという、欧米社会における基本的な道徳観



高橋貞太郎設計のサンバーラーが特長のクラシックホテル



サンバーラーからは晴れば伊豆大島が望める



円弧を描く窓が美しいティールーム サンバーラー

地域：伊東市宇佐美 時代：昭和
癒やされた人：敗戦後の全国民



みかんの花咲く丘

戦後童謡最大のヒット曲が人々をなぐさめた

敗戦を迎えた 1945年（昭和20）8月15日から日本では戦後の生活が始まりました。そんなときに人々の心をなぐさめたのが童謡「みかんの花咲く丘」です。作詞を担当したのは加藤省吾。「やさしい和尚さん」や「かわいい魚屋さん」でも知られる童謡作詞の第一人者です。

作曲は海沼實。「お猿のかごや」「里の秋」で有名な作曲家です。「みかんの花咲く丘」は、1946年（昭和21）に NHK ラジオが都内の本局と伊東市内の小学校で二元生放送を行う際に、当時人気絶頂だった童謡歌手の川田正子に歌わせる歌を作るよう、海沼に依頼されたものでした。

しかし前日になっても曲はできあがらず、都内の自宅で苦しんでいたときに偶然訪れてきた加藤に作詞を依頼、加藤は「静岡からの放送」ということからイメージを膨らませ、たった 30 分で歌詞を完成させました。

その詞を手にも、伊東への列車に乗った海沼は、車内でもまだ曲が浮かばなかったのですが、やがて窓外に広がる海が見えました。場所は神奈川県国府津駅。そこから着想が生まれ、宇佐美駅に到着したときにはメロディが完成していたという離れ業で生まれたのがこの曲だったのです。

伊東に着いてからは翌日に備え川田正子と歌の特訓、当日、川田は見事に歌い上げます。ただ1回の放送のために作られた曲はみかん畑や海の風景が目につくような明るい三拍子で、多くの人の心をつかみ、たちまち話題となりました。そして、戦後の童謡では最大のヒットとも言われるほどの人気を博したのです。

宇佐美には「みかんの花咲く丘」歌碑があります。小高い丘の上にある歌碑の背後には、歌そのままのみかん畑、遠く広がる相模灘が見渡せます。



みかん畑と宇佐美の海と町



亀石峠に向かう途中に「みかんの花咲く丘」の碑が立ち、宇佐美の町を見下ろしている

地域：伊東市街地 時代：昭和
癒やされた人：全国民、特に首都圏の人



温泉客が押し寄せた松川地区の木造三階建て旅館

海・山・川・温泉。自然の恵みに人々は伊東を目指した

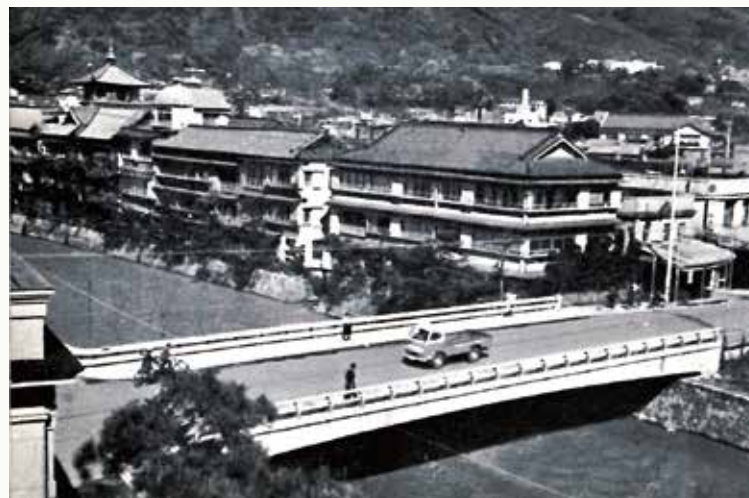
【写真1】は昭和30年頃の松川（大川）からの大川橋と川沿いの温泉旅館の様子です。背後に山、旅館からは松川が望め、また海も広がっている伊東の温泉地は、大正年間から昭和にかけて大盛況となり、川沿いには木造三階建ての旅館が建ち並んでいました。

【図1】は1933年（昭和8）の伊東を描いた鳥瞰図ですが、旅館と並んで別荘の多さに驚きます。一等地にある北里別荘は39ページで紹介している北里柴三郎の別荘です。この時点ですでに多数の旅館があったことも分かりますが、1938年（昭和13）に伊東線が開通すると、観光客の数はますます増えました。

しかし、3年後には太平洋戦争開戦となり、観光する人も減少してきました。戦時中には松川沿いの旅館群は疎開児童の受け入れ先や、傷病兵の受け入れ施設にも転用されるなど、戦争の影響を受けていったのです。

戦後は混乱の時代が続きながらも人々は力を合わせて復興を目指し、再び伊東は温泉観光地として注目を集めるようになります。

【写真1】に写された風景は、3年後の大災害・狩野川台風後は、大きく変化してきますが、大正年間に建築された、旅館いな葉は、国の登録有形文化財に登録され、多数使われた銘木や室内の細かい意匠はそのままだ、現在はケイズハウスという名のゲストハウスになっています。並びにある東海館もまた昭和3年建築当時の温泉旅館特有の様式を残したまま現存し、見学や日帰り温泉利用ができる施設となっています。今も川沿いの道はタイムトリップ感覚を楽しめる散歩道として多くの市民や観光客に愛されています。



【写真1】 昭和30年頃の松川と温泉旅館



東海自動車が発行した伊豆ガイドブック



【図1】 昭和8年頃の伊東温泉の鳥瞰図(部分)

地域：伊東市南部 時代：昭和
癒やされた人：静岡の人、首都圏の人

リゾート地 伊豆高原の誕生

溶岩台地が産んだ屈指のリゾート地・伊豆高原

現在はリゾート地として知られる伊豆高原も、かつては観光施設がない場所でした。それが変貌を遂げたのは伊豆急行が伊東～下田間に鉄道を開通させた1961年（昭和36）以降です。

伊豆高原は大室山が噴火した時にできた溶岩台地で、温泉は湧いていませんでした。そこで伊豆急行株式会社などでは、この地域の分譲開発とともに、湯の沢から温泉を引いてくるといふ計画を立て、実行したのです。1965年（昭和40）からは企業の保養地や寮なども建設され、開発にますます拍車がかかるようになりました。1959年（昭和34）に開園した「伊豆シャボテン公園」に続き、1965年（昭和40）には「伊豆ぐらんぱる公園」が開園、美術館やミュージアムなどもオープンし、日中はこうした施設や城ヶ崎などをめぐり、夜は宿で過ごす周遊型の観光客が大量に訪れるようになりました。対島地区は開発ラッシュとなり変貌の度合いが激しかったため、1973年（昭和48）には伊東市が土地開発に規制をかけるほどでした。

その後は規制に沿った開発が進む形でリゾート化していきます。東京からも近く、海・山の景勝地に恵まれた上、観光施設が揃った伊東市南部はこうして屈指のリゾート地として発展したのです。

ちなみに「高原」と言われていますが、この一帯は溶岩台地です。約4000年前の大室山の噴火の際に流れ出した溶岩がこの平坦な地形を作り上げたのです。景勝地として名高い城ヶ崎の門脇吊り橋からは、溶岩流が作り上げた柱状節理など珍しい地形を楽しむこともできます。



世界から3000種以上のサボテンが集められてオープンした伊豆シャボテン公園



開発間もない大室山周辺は建物が少ない



岩室山から大室高原をのぞむ



別荘地は「新しい温泉文化村の建設」ということで開発がすすめられた



地域：伊東市街地 時代：昭和
癒やされた人：全国民、特に首都圏の人



全国に伊東の名を知らしめたハトヤと温泉街

地球からの恵み・温泉が伊東を世界的な存在に押し上げた

伊東が著名な観光地となった背景に、温泉の存在があったことは間違いありません。江戸時代には将軍はじめ幕府要人が伊東から温泉の湯を運ばせるほど（参考：30ページ）効能豊かな泉質は、その後の時代も人々に愛され続けてきました。大正時代初期になると、掘削された温泉を引いた木造3階建て旅館が松川の両岸に建ち並び、訪れる人は絶えないほどの人気となりました。

温泉旅館滞在が主体だった中、大型ホテルも登場してきました。1947年（昭和22）には岡地区にハトヤホテルがオープンします。1961年（昭和36）からテレビで放送されたCMには「伊東」の地名が盛り込まれたため、観光地としての知名度はさらにアップしました。このCMソングは、まだ名が知られる前の野坂昭如*が作詞したことで有名です（作曲はいずみたく*で、この2人はゴールデンコンビと呼ばれました）。伊東は名実ともに一大観光地となり、1970年（昭和45）には、毎週末に10万人の観光客が訪れるほどになりました。

伊東市の宿泊客数のピークは1991年（平成3）の394万人です。日帰り客のピークも同じく1991年で501万人となっています。しかし、時代の変化とともに客数は緩やかに下がり、2017年（平成29）には宿泊客294万人、日帰り客数371万人となっています。再びにぎやかな伊東を取り戻すために、市を上げてさまざまな取り組みがなされています。

*野坂昭如：日本の作家、歌手、作詞家、タレント、政治家。『火垂るの墓』が有名
*いずみたく：日本の作曲家で政治家。「見上げてごらん夜の星を」をはじめ、『ゲゲゲの鬼太郎』や『それいけ!アンパンマン』の作曲でも有名



伊東の知名度を上げたハトヤホテルは当時としては斬新な設計だった



現在は、レトロフューチャーとして再び脚光を浴びている



昭和40年代の夜のキネマ通り



伊東駅の団体客 牧野正氏提供



駅前には溢れんばかりの人で賑わい
観光コンクール写真より



あんじんさい かまろ
投針祭は仮装のパレードも行われていた
青木敬博氏提供

地域：伊東市南部 時代：昭和～平成

癒やされた人：全国民、特に首都圏の人



テニス、スキューバダイビング……。人々は伊東を目指した

バブル期の華やかなレジャーが花開いた

1980年代半ばから90年代はじめにかけて、日本はバブル景気と呼ばれる好況期になりました。この頃、伊東にはレジャーを楽しむ人が次から次へ訪れました。目的の一つは海。1989年（昭和64／平成元年）に公開された映画「彼女が水着にきがえたら」の大ヒットによりブームとなったスキューバダイビングを楽しむ人々が、ダイビングのメッカである伊豆海洋公園（IOP）を訪れるようになったのです。IOPは初心者から上級者まで楽しめるダイビングスポットで、海中は大室山が噴火した際に海中に流れた溶岩が作り出す複雑な地形によって、大型の回遊魚から底生生物や魚類、岩に定着して大きくそびえるウミトサカなどの腔腸動物が見られ、ダイバーにとって夢のような光景が広がっています。

IOPダイビングセンターを設立した益田一は、海洋生物の写真を撮り図鑑を多数制作し、日本のダイビング界に大きな足跡を残しています。IOPでダイビング技術を修得したダイバーからは、日本を代表する水中カメラマンが多数輩出されました。また、海中の素晴らしさは海外の水中カメラマンも魅了し、『ナショナルジオグラフィック』に世界各地の水中写真を掲載した巨匠・デヴィッド・デュビレも多数の写真をここで撮影しています。

一方、伊豆高原ではこの時期、先駆けとなったロヴィングを中心に、テニスコートを併設したペンションが建てられ、大学などのテニスサークルの隆盛も相まって、テニス合宿を楽しむ人々で溢れました。

伊東ではダイビングもテニスも、アフターにグルメや美しい景色、観光施設、温泉を楽しむことなどで、さらに人気を高めていったのです。



東海自動車が発行していた「伊豆だより」'88.8ではスキューバダイビングが特集されている



80年代のダイバーで賑わうIOPのエントリーポイント、混んでいる時は順番待ちだった 伊豆海洋公園ダイビングセンター提供

不思議の池・浄の池

小さな池に熱帯の魚が生息、一時は国指定天然記念物に



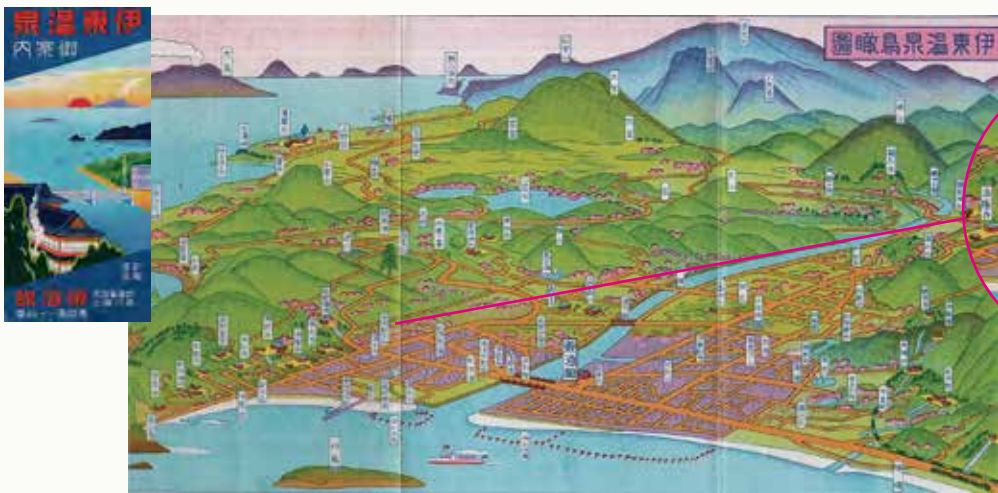
天然記念物として人気を博してした浄の池は絵葉書にもなっていました
写真提供: 伊東温泉旅館ホテル協同組合

かつて、市街地の和田にあった浄の池という小さな池は、淡水の池なのに水温が26～28度あり、珍しい熱帯性の魚もいたという不思議な池でした。江戸時代には存在がすでに知られていたようです。嘉永年間に書かれたとされる『伊東誌』にも、「異魚 または毒魚とも言う。伊東和田村の小池にい魚を産す」と書かれています。生息していた魚は、蛇鰻（じょうなぎ：オオウナギ）、毒魚（どくぎよ：オキフエダイ）、湯鯉（ゆごい：ユゴイ）、迅奈良（じんなら：コトヒキ）、横縞（よこしま：シマイサキ）の5種といわれています。

浄の池には温泉が湧出していたものと思われませんが、海水魚がなぜ池に生息するようになったかは今となっては不明です。明治後期から大正に

かけては湯治に訪れた客が大勢見物に訪れ、周囲には茶屋ができるほどの賑わいだったとか。1936年（昭和11）にはこれらの魚を描いた絵葉書も販売されるほどの人気でした。

この池は1922年（大正11）に特有魚類生息地として国指定天然記念物に指定されましたが、後に狩野川台風の影響や温泉湧出が無くなったことで魚類も姿を消したため、1982年（昭和57）に指定解除されています。池は現在の玖須美温泉通りから一本南の道筋にありましたが、現在はビルが建てられています。しかし、室生犀星が大正期に作った「じんなら魚」という詩を刻んだ詩碑は、いまでも松川沿いに見ることができます。



東海館が発行した伊東温泉御案内にも伊豆・伊東の名所として記載されています 資料提供: 伊東温泉観光・文化施設東海館



松川沿いの室生犀星の「じんなら魚」の詩碑

伊豆伊東の温泉（いでゆ）に
じんならと伝える魚棲みけり
けむり立つ湯のなかに
己れ冷たき身を泳がし
あさ日さす水面に出でて遊びけり……

「イトウジン」として生きる

伊東をふくむ伊豆半島は、“地球の中でも特別な場所”です。

今も活動を続ける二つの火山弧（15ページ：橙色の本州弧と桃色の伊豆小笠原弧）が「人」という字の交点で、現在進行形で衝突している現場は、地球上でここだけだからです。

そうした大地の成り立ちより、本州弧に住まう人のことを本州人、伊豆小笠原弧に住まう人のことを伊豆人と呼ぶことができます。

伊東は、伊豆半島の中で最も新しい地層がある伊豆東部火山群に位置しており、火山に祝福された大地です。

伊東は、大室山山頂にある歌碑「伊豆は日のしたたるところ花蜜柑」に表されるように、水平線から昇る日の光を一身に浴びた、活氣溢れる大地です。

伊東は、本州日本を縁の下で癒やし支える包容力を持ち合わせています。それはまるで月の光のような、優しさ宿る大地です。

そんな類稀なる大地に住まう私たち伊東人（イトウジン）は、フレッシュで、エネルギーで、またリフレッシュする力と豊かさまでを、知らず知らずのうちに受け取りながら暮らしているのです。

伊東の花、椿には、“控えめな素晴らしさ”という花言葉があり、伊東人の奥ゆかしさを象徴しています。

「また来たい」「住んでみたい」「ずっと住みたい」訪れる人が思わず口にするその声の秘密は、天地自然に恵まれた伊東の大地と、伊東の人々にあるのかもしれませんが。

例に漏れず、大地と人々に魅了された本州人の私は、すっかり伊豆伊東の虜に。今では、イトウジンとして毎日を楽しんでいます。

この先も、何百年、何千年と幾久しく、私たち一人ひとりが時層を重ねることで、この地に宝物は増え続け、伊東という宝箱はますます輝きを放つことでしょう。



海から見た大室山 火山が噴火しマグマが海に流れ込んだ形跡がひと目でわかる
※豆州は通常“ずしゅう”と読みますが、韮山代官・江川英龍の江川文庫には“とうしゅう”というふりがながふられた文書があり、ここではその読みに基づいています。



上空から見ると世界の中でも特殊な地形がわかる



橋立の吊り橋に近い、対島にあるなかなか見ることができない幻の滝

もっと知りたい伊東の歴史

伊東の歴史を深く知るためのコラム

伊東に名を残す伊東祐親

伊東祐親は平安時代の武将であり、伊東の豪族でした。先祖は京から東海地方へ進出してきた工藤家で、やがて何代目かが伊豆国押領使となった頃から「伊東」を名乗るようになったといわれています。祐親は工藤氏の6代目（または8代目）です。平清盛からの信頼が厚く、源義朝・頼朝が平治の乱を起こしたのち、伊豆に流された頼朝の監視役を任ぜられています。

祐親の名は23ページにある『曾我物語』でも知られていますが、伊東市民にとっては今でも伊東の開祖として英雄であり「伊東祐親まつり」を行い偉業を称えています。伊豆で大きな勢力を持ち、伊東の名を広く知らしめた祐親の銅像は物見塚公園にあり、今も伊東市を見守っています。

伊東氏と宇佐美氏

「伊東市」に名を残す伊東氏のほか、平安以降、鎌倉・室町時代に現在の伊東近辺に存在した豪族は宇佐美氏などがあり、いずれも現在の地名に名を見ることができます。

勢力争いが激しかった当時、家を存続できない武家も多かった中、伊豆の豪族であった伊東氏と宇佐美氏は家名をつないでいきます。伊東氏も宇佐美氏も鎌倉幕府においては御家人として活躍したようです。

伊東氏は現在の伊東周辺を本拠としながら、各地に勢力をのばし、系統もいくつにも分かれていきました。九州や東北、濃尾、甲信地方など各地に伊東を名字とする一族もいます。

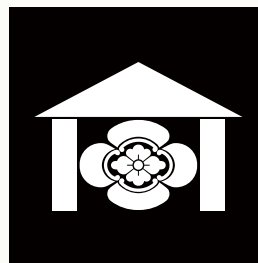
宇佐美氏は宇佐美を発祥の地とする豪族で、ルーツとしては伊東氏の同族である工藤家の流れを組む宇佐美氏と、平姓の宇佐美氏があったようです。こちらも同様に各地に勢力を伸ばし、越後のほか、不明確ですが讃岐または阿波に所領を持った宇佐美一族がいたと考えられています。全国に存在する「伊東」「宇佐美」姓の人々のルーツはすべて伊東の地にあるといえるのです。



伊東市役所に隣接する物見塚公園の伊東祐親の像



伊東市大原にある五輪の塔が伊東祐親の墓といわれている



伊東氏の家紋の庵木瓜



宇佐美氏の家紋の三つ盛り瓶子

伊東の地と源頼朝

みなものよりとも

鎌倉に幕府を開き、征夷大將軍として武家政権の基礎を作った源頼朝は、伊東とも深い関わりがあります。頼朝の父・源義朝が平治の乱で敗れると頼朝はすべての官位を解かれ、1160年（永暦元年）伊豆に配流されます。このとき監視役となったのが伊東祐親と北条時政でした。頼朝が伊豆のどこにいたかは諸説あります。一般的には蛭ヶ小島（現在の伊豆の国市）といわれていますが、祐親と平家の結びつきの強さを考えると、伊豆で過ごした20年余りのうち、前半は伊東にいたと考えられるようになっています。

頼朝はやがて伊東祐親の娘である八重姫と恋に落ち、八重姫は子（千鶴丸）を授かります。しかし平家を恐れた祐親は、千鶴丸を亡き者としてしまったという悲しい史実があります。その後、頼朝はもうひとりの監視役であった北条氏の娘・政子と結ばれたのは、運命の不思議でしょうか。

頼朝と八重姫が人目を忍んで逢ったのは音無神社とされています。その由縁か、今は縁結びの神社として多くの人々が訪れる場所となっています。

伊東の巨木

伊東市のいくつかの神社には、驚くほどの巨木があります。葛見神社には胸高幹周 16メートルにもなるクスノキがあり、「葛見神社の大クス」として国指定天然記念物となっています。胸高幹周は屋久島の縄文杉とほぼ同じと言われ、樹齢は千数百年にもなるといわれています。

また八幡宮来宮神社にも見事なスギ（胸高幹周5メートル）があります。樹齢は約1000年とされ「千年杉」と呼ばれ、人々に崇められています。ここには源頼朝が伊東にいた時代からこの地にあったと伝えられるシイの木「高見のシイ」（胸高幹周 8メートル）もあり、市指定の天然記念物となっています。

さらに宇佐美の比波預天神社には日本最大級のホルトノキ（胸高幹周 6.9メートル）があり、県の指定天然記念物となっています。いずれの巨木も幹の形や高さなど、長い時代を生きてきたことが感じられます。伊東のどのような歴史を見つめてきたのでしょうか。伊東市には神社仏閣にほかにも巨木があり、その自然の神秘に触れようと、巨木巡りをする人もいます。



源頼朝が八重姫と密会したという音無神社



八幡宮来宮神社も樹齢 1000 年になるスギが崇められている



日本最大のホルトノキは残念ながら折れてしまった



葛見神社の大クスは樹齢 1000 年を超える

にちれんしんこう ほっけきょう

日蓮信仰・法華経

日蓮宗の宗祖である日蓮聖人は、布教活動をする中で幾度も法難（宗教活動の中で受けた弾圧、迫害）に直面しました。特に大きな4つの法難は四大法難といわれ、伊東に流されたこともその1つで「伊豆法難」と呼ばれています。しかし流罪の後も布教活動に尽力し、伊東の地でも信者を増やし続けたため、伊東は日蓮の靈蹟とされています。22 ページでもご紹介していますが、日蓮が伊東の地に最初に上陸した富戸や、川奈、玖須美には日蓮宗の寺社が多く存在します。精力的に宗教活動を行った日蓮ゆかりの地は数多いですが、伊東はその中でも重要な場所として、鎌倉時代から今に至るまで靈蹟をたどる人がこの地を訪れています。



相模半島の日蓮を助けた夫婦もここに眠る蓮慶寺
日蓮ゆかりの枝垂れ桜が有名



蓮着寺に立つ日蓮像



相模灘から上る朝日を望む岨岩に建つ日蓮像



日蓮が置き去りにされた岨岩に近い蓮着寺と日蓮像



伊東市役所に隣接する日蓮ゆかりの佛現寺

伊東市の観光をブランドにするために

ここまで、わたしたちが時層の中から探してきた伊東の宝物を見ていただきました。
ではこれらの宝物をどう伝え、発信していけば“新しい伊東の観光”を確立できるでしょうか。
それには一瞬で宝物の魅力伝えるツールが必要です。
そのために、わたしたちが感じた伊東にしかない歴史、物語を込めたロゴを作りました。
伊東を訪れる人が、これからさまざまな場所でこのロゴを目にして、
メッセージを受け取っていきます。
伊東に関係するあらゆる人の心に共通のイメージが生まれたとき、
未来に向けた伊東市の観光 = 伊東ブランドが生まれていくのです。

伊東市観光のプロジェクトに共通のシンボルを！

伊東市の観光プロジェクトをわかりやすくしよう

観光が主力産業のまち、伊東市はこれまでに数多くの観光キャンペーンを行ってきました。市が主導して進めたキャンペーンもあれば、観光協会が進めてきたものもあります。盛り上がっているイベントも数多くあります。たとえば、夏季に毎週行われる花火大会は、伊東市内外の人たちが楽しみにしています。

今までは、一つひとつのキャンペーンやイベントやお祭りに特色があったので、集客ができればビジネスとしての観光モデルは成り立ちました。しかし、これから未来に向けての伊東市の新しい観光モデルは、市民みんなで伊東市を観光のまちとしてプロモーションしていくことで創られていくと考えています。

そのために必要なのは、観光に関する事業やプロモーションの際に誰もが使える共通のロゴを使用することです。伊東市の普遍的な価値を表現したこのロゴが使われることで、首都圏はじめ海外も含めた市外に強力な印象をアピールすることができます。

そのためにわたしたち「伊東市ブランド研究会」では、新しい観光プロモーションのロゴを創りました。



伊東観光協会提供



伊東観光協会提供



伊東観光協会提供

ブランドロゴの紹介

伊東のいちばんの共通項は海から昇る太陽きょうつうこう のほ

「伊東市ブランド研究会」が立ち上がったときから、「現在の伊東市を象徴するものは何だろう」と話し合ってきました。話を積み重ねるごとに、伊東市は多様性に満ちていることがわかってきました。

伊東市の大きく3つに分かれている地域「宇佐美地区・伊東市街地地区・南部地区（第3次伊東市観光基本計画より）」はそれぞれ異なる特色があり、それが多様性を生み出し、多種多様な観光アクティビティをつくり出しています。それこそが、伊東市観光の特徴とくちょうでもあります。

それでも、わたしたちは伊東市民が共通で持っているシンボルは必ずあると探し続け、やっと見つけることができました。


伊東市に住む人々は、毎朝、相模灘さがみなたから昇ってくる太陽と一緒に暮らしています。その朝日こそ、伊東市に住む人々が30,000年もの時間の流れで共通で持つて来たシンボルであり、最大の恩恵おんけいであり、宝物でした。

「伊東市ブランド研究会」では、伊東の朝日をモチーフにロゴを作成しました。

このロゴで、伊東市の最大の宝物を、すべてのみなさまと分かち合えればと思います。



 C: 0 M: 60 Y: 70 K: 0
R: 240 G: 132 B: 74
オレンジ

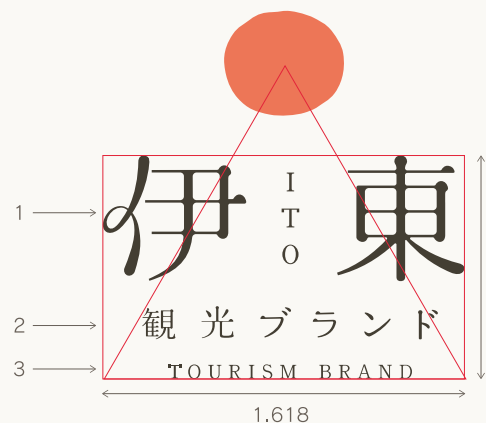
 C: 0 M: 0 Y: 0 K: 100
R: 35 G: 24 B: 21
ブラック

ブランドロゴのプロポーショナル

【基本の形】



【プロポーショナル】



コアになるロゴタイプ（文字）の部分は3つのブロックで構成されます。

- 1：まちの名前を表す伊東の文字。文字の中央に英文が縦書きで入り、多様な人たちから認識されるようにします。
- 2：ここに多様なカテゴリーの名称やメッセージが入ります。例えば「旅館ブランド」「地魚ブランド」など使用するカテゴリーの名前が入ります。
- 3：カテゴリーの英文名が入ります。

コアになるロゴタイプは縦を1とすると、横幅が1.618となる黄金比率のレイアウトになります。

また朝日を表すオレンジ色の楕円は横幅を一边とした正三角形の頂点の位置に中心が来るレイアウトになります。

【横位置の場合】



朝日のシンボルマークとロゴを横位置に使う場合のレイアウトは以下ようになります。

コアになるロゴタイプは縦を1とすると、横幅が1.618となる黄金比率のレイアウトになります。

また朝日を表すオレンジ色の楕円の位置は、「伊東」の文字の高さを一边とした正三角形の頂点の位置に中心が来るレイアウトになります。

ブランドロゴのバリエーション

【地が暗い色の上に記載する場合】



地の明度が低い場合は文字の色を白にする

【朝日を強調するレイアウトの場合】



地の色が朝日のシンボルマークに近い色の場合はアイソレーションを守った白の余白を入れる

【縦組みの場合】



【伊東の文字のみ使用する場合：横組み】

伊東

【伊東の文字のみ使用する場合：縦組み】

伊東

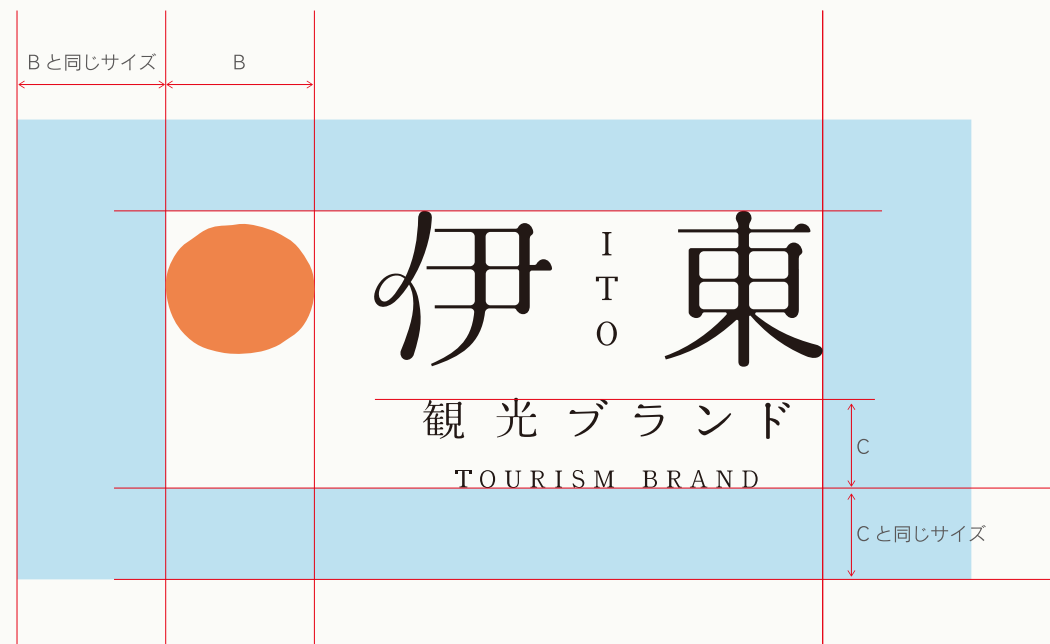
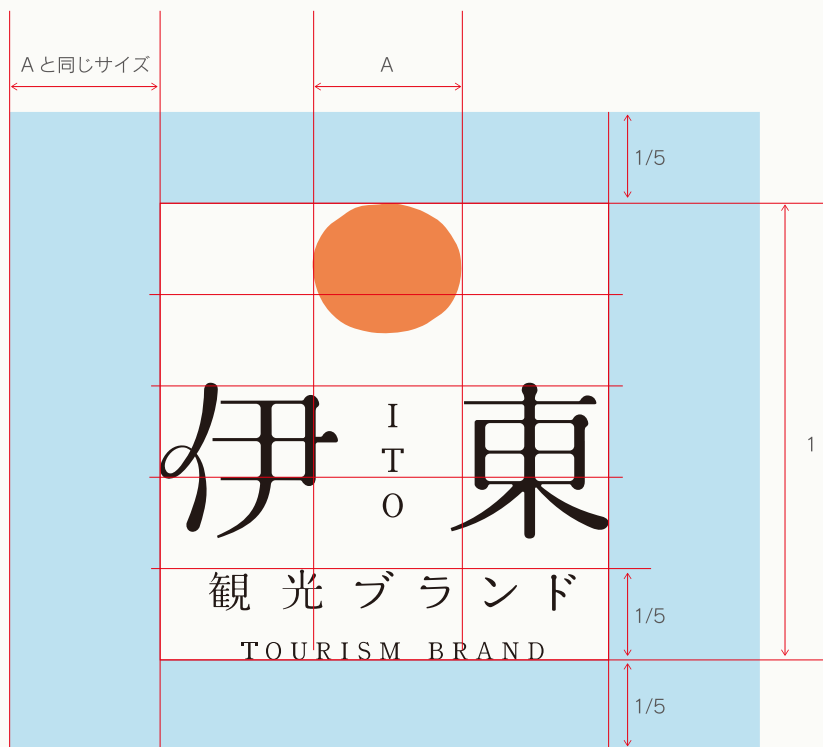


ブランドロゴのルール

アイソレーション（保護エリア）

ロゴのアイソレーションとは、他のロゴや、画像、文字などが、レイアウトする際に、この領域に入らないように気をつけるべきエリアのことをいいます。このロゴを使用する際は、この領域に気をつけてください。

また、ホームページ等に使用する際も、ロゴのサイズギリギリではなく、このアイソレーションエリアに合わせて、Jpg 等の書き出しをしてください。



ブランドロゴの展開

【県内向けプロモーション：例】



【食のブランド：例】



【ホームページ等に使用：例】



伊東観光協会 HP より

【首都圏向けプロモーション：例】



【アウトドアアクティビティ：例】



【写真等に使用：例】



【インバウンド向けプロモーション：例】



【インバウンドの温泉：例】



推奨フォント

和文：漢字ひらがな 源ノ明朝 Adobe名：Source Han Serif

【源ノ明朝は、東アジアで用いられている4つの言語（簡体中国語、繁体中国語、日本語、および韓国語）に必要な文字をサポートしています】

和文：カタカナ ロタン

英文：アルファベット数字 Seoge UI

伊東市ブランド研究会の紹介

【あしがき】

あらためて伊東のブランドとは何かを考える機会になりました。

ブランドとは誰かに^{だれ}自慢^{じまん}できることではなくて、伊東にしかない^{ゆい}唯一無二^{いつむに}で伊東市民が^{ほこ}誇りに思えるもの。

それは時間が作り出してきたものであり、伊東で人生を送って来た、本当に多くの人たちが残していったものだと思います。

でも、それらはいつも見えている訳ではなく、時層を^ほ掘り起こして初めて見えてきたものです。

この作業に取り組むにあたり、多くの方たちのご協力をいただきました。この場を借りまして^{かんしゃ}感謝の意をお伝えいたします。

この冊子が、伊東に住まう方たちの誇りになることを願います。見つけた宝物を大切に^つして、多くの方たちと共有して、宝物をもっと^{みが}磨いて、次世代の子どもたちに引き継いでいけたらと思います。

令和3年3月吉日

伊東市ブランド研究会一同

【ブランド研究会の会議】



【編集】

制作：株式会社 JTB 静岡支店

企画：伊東市ブランド研究会

編集：株式会社カラーコード

資料収集：株式会社アールイー・コミュニケーションズ

クリエイティブディレクター：浅井由剛（株式会社カラーコード）

テキスト：有川美紀子

アートディレクション：黒澤夏子（株式会社カラーコード）

イラストレーション：爲壮京子（株式会社カラーコード）

参考文献・写真提供・協力一覧

【書籍】

伊東市史 史料編
図説 伊東の歴史
伊東市史 通史編 伊東の歴史Ⅰ、Ⅱ
伊東の今・昔——伊東市史研究・第9号
日本歴史地名大系 平凡社

【冊子、パンフレットなど】

三浦按針と横須賀 横須賀市政策推進部文化振興課
広報いとう No.1070 特集 大室山山焼き物語
伊豆高原自遊時彩 株式会社伊豆急コミュニティー

【論文・書類】

日本建築学会誌論文集 40 藤島玄治郎
伊東市の観光開発の歴史と今後の課題 玉木栄一
南から来た火山の贈りもの 伊豆半島ジオパーク 世界ジオパークネットワーク加盟申請書
「曾我物語」における源頼朝について～真名本と仮名本の相違・その主題 小井土守敏
東郷平八郎の人と思想 宮永孝
三浦按針 幸田成友
ゲーテと木下空太郎 皮膚科学との関わりを中心に 石原あえか
明治期における英語教育の指導者たち 前野澄子
ディレタント考 木下空太郎の場合を中心に 青山友子

【ウェブサイト】

北里研究所北里柴三郎記念室
中谷宇吉郎 雪の科学館
ふじのくに文化資源データベース（静岡県文化・観光部文化政策課）
吾妻鏡データベース（国文学研究資料館）
東京土木施工管理技士会 機関誌「DOBOKU」第60号 「江戸時代の石垣遺構」
WEB サイト：「城びと」 ㈱東北新社
伊東市ホームページ
身延山久遠寺オフィシャルサイト
日蓮宗ポータルサイト

【写真提供・その他協力】

伊東市教育委員会
伊東市生涯学習課
伊東市文化財管理センター
伊東市観光課
一般社団法人伊東観光協会
伊豆半島ジオパーク推進協議会
国立博物館デジタルデータベース

奈良文化財研究所
熱海市立図書館
伊東温泉観光・文化施設 東海館
中央区立郷土天文館「タイムドーム明石」
東海自動車株式会社
伊豆海洋公園ダイビングセンター
一般社団法人日本童謡学会

加藤三智
学校法人北里研究所 北里柴三郎記念室
東郷神社
一般財団法人中谷宇吉郎記念財団
新潟市 安吾 風の館
西尾市 尾崎士郎記念館

（順不同 個人の場合は敬称略）



伊東市観光ブランドブック

令和3年 4月 1日 初版第一刷発行

著者 伊東市ブランド研究会

発行所 伊東市観光課

制作 株式会社JTB 静岡支店

編集 株式会社カラーコード

印刷所 いさぶや印刷工業株式会社

連絡先 〒414-8555 静岡県伊東市大原二丁目1番1号
0557-36-0111 (代表)

万一、落丁乱丁のある場合は伊東市観光課までご連絡ください。
無断転載禁止

©Ito-city Brand Lab. Printed in Japan

